【論　文】

古典期前期におけるカーン王朝の本拠地の所在についての一考察

ーツィバンチェの碑文の分析からー

佐　藤　孝　裕

1．はじめに

メキシコ、カンペチェ州の内陸部、グァテマラとの国境のほど近くに位置するカラクムル Calakmul は、遺跡のもつ歴史的価値とそれを取り巻く豊かな自然環境のゆえに、ユネスコ世界遺産にも指定されている重要な遺跡である[1]。最盛期の都市の規模や人口の多さの点では、古典期マヤ社会最大の国家であったティカル Tikal に匹敵し[2]、また低地南部マヤ社会に及ぼした政治・軍事的影響力においても、一時はティカルを凌駕した。低地南部マヤ地域の古典期の遺跡の碑文中に、蛇の頭の主字を有する紋章文字[3]が頻出することは、以前から知られていたが、1970年代に入ってそれがカラクムルのものであるとマーカス Joyce Marcus によって初めて唱えられた。それ以降も、カラクムル遺跡における調査が進展するにつれて[4]、その巨大さがますます明らかになり、ティカルと並ぶ古典期マヤ社会の二大超大国の一つとして、カラクムルはカーン Kaan 王朝[5]の首都としての地位を揺らぎないものとしたかのように思われた。

しかし、1993～1994年に、カラクムルの北東140kmほどの所にある、キンタナ・ロー州のツィバンチェ Dzibanché 遺跡で、キンタナ・ロー南部考古学プロジェクトが行った調査の結果、カラクムルをカーン王朝の首都とする説に疑問が投げかけられるようになった。この調査では、人物像や文字が刻まれた石のブロックが多数見つかったのだが（Verasquez García 2004：79)、その文字テキストの中に蛇頭紋章文字とカーン王朝の王名があったのである。同時期のカラクムル遺跡のいかなるモニュメントにも、蛇頭紋章文字が見られないのに対して、ここツィバンチェ遺跡の石のブロックに、蛇頭紋章文字がカーン王朝の初期の王名と共に生起しているのである。このことから、少なくとも古典期前期のカーン王朝の首都はツィバンチェではないか、という仮説が提唱されるようになったのである。

本稿では、このツィバンチェ遺跡の石のブロックに刻まれた碑文について分析することで、この問題について検討してみたい。

2．ツィバンチェ遺跡の概略

「木の文字」を意味する[6]ツィバンチェは、ツィバンチェ・グループ、トゥティル Tutil、

ラマイ Lamay・グループあるいは中央コンプレックス、キニチナー Kinichná の四つの区域からなる遺跡である(Nalda 2004：13)。これらの地区に人々が居住し始めたのは古く、先古典期中期にまで遡る。その後、古典期後期後半まで間断なく人々は居住し続け、遺跡全体として見れば、後古典期後期まで人々は住み続けた(Nalda 2004：23)。サクベ sacbe でつながったこの四つの地区を合わせた総面積は20km²にも達し、最盛期には４万人もの人口を擁していたと推定されている（Nalda 2004：18-19)。古典期最大規模の都市ティカルの中枢部の面積が約16km²であることを考えると、ツィバンチェがいかに広大な規模を誇る都市であったかが想像できる[7]。しかも、この広大な版図は、古典期前期前半には既に達成されていたようである[8]。

人物像や文字が刻まれた石のブロックが見つかったのは、この四つの地区の中でも最大のツィバンチェ・グループである。この地区の「捕虜の建物」と名付けられた建物の前面に取り付けられた階段の中に、捕虜と思われる人物像と文字が刻まれた石のブロックが複数見つかったのである。三段から成るピラミッド型の基壇である「捕虜の建物」は、古典期前期に最初に建築され、これには典型的なペテン Petén 様式の建築技法が見られる（Nalda 2004：19)[9]。ただし、この階段を構成する石のブロックは、コパン Copán やドス・ピラス Dos Pilas にあるような、いわゆる「碑銘の階段」とは性格が大きく異なっている。つまり、ツィバンチェの各石のブロックは、何の脈絡もなく雑然と並べられているのである。このことから、これらの石は「捕虜の建物」よりも古いどこか他の建造物から持ち去られ、刻まれた内容を顧慮することなく、この建物の前に再設置されたものと考えられている（Nalda 2004：21；Verasquez García 2004：79)。「捕虜の建物」は、古典期後期と古典期終末期に小規模な改築が行われているのだが、後者の第四建築相にこの五段の階段が取り付けられた（Nalda 2004：20)。そのうち一部に、ここで問題となっている彫刻の施された石のブロックが用いられているのである。

先にも述べたように、これらの石のブロックは、本来の意図を無視して再利用されたものであり、そこにこめられたメッセージは、ずっと以前の古典期前期に属するものである。これらの石材が、単なる建築材としてしか認識されていなかったことは、その分布からも明白である。と言うのも、ブロックの中には、「捕虜の建物」の階段の一部を構成していないものも含まれているからである。モニュメント[10]４、モニュメント16、モニュメント17とモニュメント18は階段の下で見つかっているし、モニュメント21は、「捕虜の建物」が面しているガン Gann 広場に面している別の建物「建物XI」に、またモニュメント３は「建物XII」、モニュメント２は「鵜の建物」にあったのである（Nalda 2004：20-21)。

これらの石のブロックは、本来の用途の観点から見て、二つに大別されるようである。一つは、輪郭のわずかな空間を残して、文字や捕虜の肖像が刻まれており、もう一つは、彫刻が施されたのは上半分のみで、下半分は未加工のまま残されている。この両者の間には、サイズに相違があり（Verasquez García 2004：79)、本来石段として用いられていたのは前者のみで、後者は建物の軒蛇腹として使用されていたのではないかと推測されている（Nalda 2004：20-21)。また、彫られた内容の主題も、異なっている。前者には、体

を縛られた捕虜と思われる人物が一人彫られているだけなのに対し、後者のうちモニュメント16とモニュメント19には、複数のエリートと思われる人物が彫られている。なお、後者の残る二つのブロックであるモニュメント２とモニュメント４には、文字しか刻まれていない。

更には、製作時期にも違いがあり、刻まれた日付から、前者のほうが後者より早く製作されたと考えられる。

次章では、モニュメントの内容について詳しく見てみたい。

３.「捕虜の建物」のモニュメント

前の章でも記したように、ツィバンチェのモニュメントは、内容、用途、製作時期のいずれの点から見ても、二つに大別することができる。そこで、ここではこの両者について、別々に検討してみたい。両者を区別するために、彫られた光景の違いに基づいて、「捕虜グループ」と「エリートグループ」と便宜的に呼ぶことにする。

(1) 捕虜グループ：モニュメント３・５・６・７・８・９・10・11・12・13・14・15・17・18・20・21・22

これらのモニュメントは、細長い長方形の石のブロックで、いずれも左端あるいは右端に文字列、その文字列に向かって手首を紐で縛られた捕虜が彫られている。捕虜の姿勢は様々で、あぐらを組んだまま前のめりになった者、左足の膝をわずかに曲げて前に伸ばし、右足をかがめている者、うつ伏せになっている者、などが見られる。マヤ地域のモニュメントに捕虜が描かれるのは、珍しくない。多くの遺跡の石碑やリンテルに、戦争で捕獲されたと見られる捕虜の姿が描かれている。ただ、直立した姿勢の王の足の下に踏みつけられるような状況や、王に捕縛される場景、あるいはまた捕縛された姿で王の御前に引っ立てられたりと、明らかに王の権威や権力を誇示する意図で表現されるのが一般的である。捕虜のみが単独で描かれるのは、マヤ地域外ではオアハカのモンテ・アルバン Monte Alban に「踊る人」という先例があるが、マヤ地域では極めて稀である。いずれにしても、捕虜の姿が描かれていることから、このモニュメントも「踊る人」と同じく、戦勝記念のために製作されたことは間違いないであろう。

このことは、文字テキストの内容からも確かめられる。このグループの石碑の多くに、共通して見られる文字がある。それは、オチ och とチェン ch'e'n である。この両方の文字が刻まれているモニュメントの碑文を列挙すると、次のようである（Verasquez García 2004：85-101）。

モニュメント３

b'olon ajaw och ch'e'n ...to'm

モニュメント５

b'uluk ok och uch'e'n Xook Ucha'...,yatej Yu[h]kno'm Ch'en, K'uh[ul] Kan ajaw

モニュメント６

...waxaklaju'n k'anasiiy och ch'e'n ...Ch'e'n ...l...Ajaw

モニュメント8b

och ch'e'n ...l, ucha'tal yate'aj k'uh[ul] Kan[al]? ajaw

モニュメント10b

[och] ch'e'n Mo'Nal; uwaxaktal yate'aj

モニュメント11

wak tz'ikin waxaklaju'n paax och ch'e'n Ajya...n...n...nal, uwaklaju'ntal yate'aj Yu[h]kno'm Ch'e'n

モニュメント12

...suutz' [och u] ch'e'n "GⅢ" ja?, yate'k'uh[ul] Kan ajaw

モニュメント15

laj'un ajaw waxak tzik[i]n och ch'e'n ...n kan[a]l, yate'ku'h[ul] Kan ajaw

モニュメント18

...ju'n un[ii]w och uch'e'n Yax K'a[h]k Jol[o]m; uho'tal yate'aj

オチは「入る」という意味であり、またチェンは「穴、井戸」の意味である（Barrera Vasquez 1995：131）。従って、「オチ・チェン」"och ch'e'n" という句を文字通り解釈すると、「穴あるいは井戸に入る」という意味になる。だが、これでは捕縛された捕虜が彫られている場面と符合しない。とりわけ、チェンが問題である。戦争捕虜とこの文字は、どのようにかかわっているのであろうか。

マーティン Simon Martin によると、戦争を主題とする文脈でチェンという文字が用いられる場合は、単なる穴や井戸のことを指しているのではなく、「町、領土」の意であるカブ・チェン "kab ch'e'n"「大地－穴」を示唆しているのであり[11]、「オチ・チェン」とは戦争に勝利した戦士が敗者の町に入る、あるいは敵の町や都市を攻撃することを意味するのだという（Verasquez García 2004：83-85）。従って、「オチ・チェン」という句が生起するブロックは、敵国へ攻め入ったことを誇らしげに宣言するものであり、これらのモニュメント全体も、建立者であると同時に描かれた捕虜の属する国への戦争の勝者が、敵国に対する戦勝を文字と絵で誇示していると考えられるのである[12]。興味深いことに、捕虜の名がテキストの中だけでなく、捕虜のベルトの背中のあたりにぶら下がっている頭の形状をしたものの頭飾りでも表わされている。従って、テキストの文字が磨滅していても、頭飾りのおかげで名前がわかる例もある。たとえば、モニュメント5の捕虜の名はショーク・ウチャ Xook Ucha'、モニュメント17の捕虜はショーク・モ Xook Mo'、モニュメント21の捕虜はカック・モ K'ak' Mo'である。

さて、問題なのは、この戦争が誰と誰の間で戦われたものであり、どちらが勝ったのか、ということである。それを示唆するテキストが、いくつかのモニュメントに見られる。たとえば、モニュメント5を見てみると、ここには「11オック ok に、カーンの神聖王ユクヌームの捕虜、ショーク・ウチャの穴に入った」と記されている[13]。つまり、カーン王国の王ユクヌーム・チェン Yuknoom Chen 1 世が戦いの主役であり、戦勝者だというのである。ユクヌーム・チェンの名は、他のモニュメントにも生起している。モニュメ

ント11には、「６メン men　18パシュ pax（505年２月15日あるいは518年２月12日）に、ユクヌーム・チェンの16番目の捕虜「アフヤ Ajya～」の穴に入った」とある。カーン王の称号こそ伴っていないが、これはユクヌーム・チェンの名の最古の生起例である。磨滅が激しく、判読がほとんど困難なモニュメント８ａにも、ユクヌーム・チェンの名が称号を伴わずに生起しているようである[14]。

この例とは逆に、王名の代わりに称号のみが生起しているものもある。モニュメント８ｂには、「カーンの神聖王の２番目の捕虜～が、穴に入った」と記されている。モニュメント12には、「カーンの神聖王の捕虜「GⅢ[15]ハ ja？」の穴に入った」と記されている。モニュメント13には、

ho'chikchan hux yaxk'in chu[h]kaj...B'a[h]lam, yate'aj k'uh[ul] Kan[a] ajaw

すなわち、「５チクチャン chikchan　３ヤシュキン yaxkin（490年８月８日）に、カーンの神聖王の捕虜「～ジャガー」が捕らえられた」と記されている[16]。最後に、モニュメント15を見ると、「10アハウ ajaw８シュル xul（471年７月29日あるいは484年７月25日）に、カーンの神聖王の捕虜「～カナル Kanal」の穴に入った」とある。なお、これは、蛇頭紋章文字の最古の生起例である。

上記の例だけでなく、このグループのブロックは全て、描かれた場面の主題や構図、捕虜の様式などが共通しているので、同時期に同一の建築物に対して用いるために製作されたものと考えられる。従って、「カーンの神聖王」としてのみ記されている者も、ユクヌーム・チェン１世を指すものと考えていいだろう。つまり、このブロック群は、多年にわたるユクヌーム・チェン１世の征服活動の記念碑なのである[17]。

(2)　エリートグループ：モニュメント２・４・16・19

先にも述べたように、これらのブロックは上半分のみに文字、あるいは複数の人物が表された光景と文字群が刻まれたモニュメントである。このうち、モニュメント２ａとモニュメント４は、文字のみが刻まれているものである。モニュメント２ａには、

huk ajaw hux uniiw utzutz[u'w] huk winaakhaab'...-jii[y]

すなわち、「７アハウ３カンキン k'ank'in（573年12月５日）に、彼は７カトゥン k'atun を終えた」と記されており、王が9.7.0.0.0のカトゥン完了を祝って刻ませたことが察せられる。このモニュメントの日付からも、このブロックが「捕虜グループ」のブロック群より新しいことは明らかである。このことは、モニュメント４でも確認できる。このモニュメントには、

...y cha'k'an cha'mak u... ...ajaw

すなわち、「２カン k'an　２マック mak（550年12月20日あるいは602年11月７日）に、王は～」と文の不完全な断片のみ残存しているが、刻まれた日付が「捕虜グループ」より新しいことは同様である。

残る二つのブロックには、文字群と光景の両方が彫られている。先ず、モニュメント16を見てみたい。ここには、左端に大きな２行２列の文字群、その右隣に三人の人物が小さく右を向いて立っている光景が描かれている。かなり磨滅しているとはいえ、三人とも頭

飾りをかぶり、豪華に着飾っている様が見て取れるので、エリート階級に属す人間であろう。ざんばら髪でほぼ裸体の上、縛られた姿で描かれた「捕虜グループ」の捕虜たちとは、扱われ方が大きく異なる。「捕虜グループ」と「エリートグループ」のブロックが、製作時期や元々の用途だけでなく、製作意図も全く異なることが、明瞭に見て取れる。左端のテキストには、

.....y Yo'aat k'uh[ul] Kan ajaw, ajaw? u...jiiy

と記されている。ここに、カーン神聖王として、ユクヌーム・チェンとは別の名である（ヤシュ Yax）・ヨアート Yo'aat という名前が生起しているのが注目される。

モニュメント19の主題は、明らかに球技である。左端に球技者、そのすぐ右には正方形に近い囲いの中に、ほとんど判読が不可能な数十の文字が刻まれている。その右には球技場の片一方の建物と、球技を見物しているらしい恐らくは五人の人物が描かれている。モニュメント16と同じく、豪華に着飾った、エリートと思しき人物たちである。ただ、モニュメント16とモニュメント19は、人物の表し方は類似しているのだが、文字の大きさが全く異なるので、この両者は別々に製作されたものであろう。文字の大きさや刻まれ方から見ると、モニュメント16に酷似しているのはモニュメント２ａである。ベラスケス・ガルシアが言うように、この両者は、それぞれかつては同一のモニュメントを構成していた一部であろう（Verasquez García 2004：97）。だとすると、9.7.0.0.0のカトゥン完了の儀式を行ったのはヤシュ・ヨアートという名の人物であるということになる。マーティンらによると、これは「最初に斧を振るう者 First Axewielder」という仮称を持つ王のことである（Martin and Grube 2000：104）。

ユクヌーム・チェン１世と「最初に斧を振るう者」王との間には、カルトゥーン・ヒシュ K'altuun Hix と「空の証人 Sky Witness」王という少なくとも二人の王がいたことが知られている。この時間的差が、「捕虜グループ」と「エリートグループ」の建造時期の差に相応しているのかも知れない。

この「エリートグループ」のモニュメントの製作時期を考える上で有用だと考えられるのが、ツィバンチェ・グループの建物Ⅵと建物Ⅱ、及びトゥティルの T-1と T-2である。これらの建築物の軒蛇腹が、「エリートグループ」のブロックと大きさがほぼ同じであることから、建造年代も同じ頃と推測できるのである（Nalda 2004：22 註６）。これらの建物が初めて建てられたのが、古典期後期の初め頃と考えられているので、「エリートグループ」のモニュメントが製作されたのもその頃であろう。このことは、碑文に刻まれた日付のうち、最古のものが573年、あるいは602年であるという事実と符合する。

「捕虜グループ」のブロックと「エリートグループ」のブロックとでは、大きさ、彫られた内容、製作時期のいずれも異なるが、カーン王にかかわることであるという点では一致している。そして、後者の方がより新しい時期に製作されたものであり、それは恐らくは古典期後期の初め頃、すなわち600年前後と考えられる。このことから、少なくとも古典期前期の中頃から古典期後期が始まる頃までは、ツィバンチェにはカーン王朝にかかわる人々が居住していた可能性が高いと言える。

4．考察

この章では、前章まで述べてきたことから一体何が言えるのか、あるいは何が問題なのかを検討してみたい。

先ず、最も基本的なことだが、現在再利用された形で残っているこれらの石のブロックが、どこから持ち去られたのか、ということである。現在ツィバンチェにあるからといって、必ずしも最初からここにあったとは限らないからである。一例を挙げると、ナランホNaranjoの「碑銘の階段」は、もともとはカラコルCaracolで建造されたものが、ナランホがカラコルを戦いで打ち破った際に、いわば戦利品として持ち帰られ、7世紀に建物B-18を修築する際に用いられたものなのである（Tokovinine 2007：15-16）。このような例は、マヤ地域では稀ではない。

しかし、このツィバンチェの石のブロックの場合は、恐らくもともとツィバンチェの建物の一部として利用されていたものであろう。一つには、これらが後世に再利用された際、敬意を払うどころか、何の意図も脈絡もなく、単なる建築資材として雑然と利用されているからである。先述したナランホの「碑銘の階段1」の例のように、他都市の建築あるいはその一部を移築する場合は、支配者の権威や権力の誇示などの政治的目的に利用するためであった。そのために、碑文が刻まれたモニュメントの場合は、刻まれた内容に利用できる価値があるからこそ、わざわざ遠路運んで新たに築造したのである。従って、ツィバンチェの例のように、彫られた光景や文字に何の顧慮も払わず、単なる建築資材として用いるのであれば、わざわざ遠隔地から運んでくる意味がないのである。もう一つの理由は、「エリートグループ」について述べた際に触れたように、これらのブロックがもともと築造されたのと同じ時期に造られたと考えられる建物が、ツィバンチェに現存しているからである。

次に、これらのブロックを最初に製作したのはどういった人たちであろうか。この点については、蛇頭紋章文字の存在が鍵を握っていると思われる。モニュメント15の碑文に蛇頭紋章文字の最古の生起例が見られることから、遅くともこの頃までには蛇頭紋章文字を有する王朝、すなわちカーン王朝が成立していたということは間違いない。これは、マヤ地域の他国と比べても早い方と言える。際立って早いティカルの例を別とすると[18]、他の主要都市の碑文に初めて紋章文字が生起したのは、ヤシュチランYaxchilanが514年（9.4.0.0.0　石碑27）、コパンが564年（9.6.10.0.0　石碑9）、ナランホが593年（9.8.0.0.0　石碑38）である。このように、471年ないし484年というのは、紋章文字の生起としては、かなり早い部類に属する。ティカルと共に、古典期マヤ社会を二分することになる「超大国」に相応しいと言えよう。いずれにしても、「捕虜グループ」にしても「エリートグループ」にしても、これらのブロックを製作した時期のツィバンチェには、カーン王朝にかかわる人々が居住していたと考えられる。

では、古典期終末期に「捕虜の建物」を改築するのに際して、新たに階段を付け加える建築材としてこれらのブロックを再利用したのは、どのような人々なのだろうか。かつて

数々の戦勝を誇ったカーン王ユクヌーム・チェン１世の功績を、否定するような形で増築がなされていることから推して、カーン王朝の権威に対立する勢力がかかわっていたことが推測される。つまり、ベラスケス・ガルシアが指摘するように（Verasquez García 2005：25)、遅くともこの時期までにはカーン王朝にとって代わる新たな政治体制が誕生したのかも知れない。

建築様式にも変化が見られる。第２章でも述べたように、古典期前期の建築に一般的に見られた建築様式は、ペテン様式であった。それが古典期中期を境に、突然廃れるのである（Nalda 2004：25)。この急激な変化は、単なる流行の変化というよりも、支配勢力の交替を窺わせる。しかも、これには戦争を想起させる暴力的な要素が伴っていたようである（Nalda y Balanzario 2006：46)。

更に興味深いことに、ツィバンチェの建築様式に変化が生じるこの頃、初めて蛇頭紋章文字がカラクムルを表すと思われる文字と共に生起するのである（Schele and Freidel 1990：176 Fig. 5：７；Grube 2004：117；Verasquez García 2005：2–3)。当時のカーン王だったユクヌーム「頭」王は、631年12月24日にナランホに「星戦争」で勝利する。そのことを記したナランホの「碑銘の階段１」に、ユクヌーム「頭」王の名と蛇頭紋章文字が生起するのだが、そこにカラクムルを指すものと考えられる地名も現れているのである。すなわち、ナランホの「碑銘の階段１」の階段６の碑文には

u-kabij yuk[noom] [?] kanal ajaw ta huxte'tuun aj chi'k nahb

「チーク・ナフブ Chi'k Nahb（あるいはナーブ Naab）の人であるカーン王、ユクヌーム「頭」がそれを命じた」（Tokovinine 2007：19–20）と記されているのである。マーティンとグルーベは、都市としてのカラクムルはウシュテトゥーン Uxte'tuun（オシュテトゥーン Oxte'tuun、あるいはフシュテトゥーン Huxte'tuun）と呼ばれ、これを含むより広い領域がチーク・ナフブと呼ばれていたとしている（Martin and Grube 2000：104)。しかしながら、チーク・ナフブはむしろ都市としてのカラクムルを表していると解釈する方が妥当であろう。その根拠として挙げられるのが、ドス・ピラスの石碑13の碑文である。ここには、カーンの神聖王ユクヌーム・イチャーク・カック Yuknoom Yich'aak K'ak' が、チーク・ナフブで即位したとの記述がある（Schele and Freidel 1990：182 Fig. 5：10)。この場合、チーク・ナフブは即位地と考えられるので、広い領域の名というより都市名と考えた方が自然である。また、「カンクェン Cancuen の略奪されたパネル」にも興味深いテキストが記されている。先ず第２行には

u tzakaj huk(k'in)ho'winikjiiy juun(?)haab'iiy i uut lajchan ha'chan kaseew och b'ihaj K'inich K'ap? Neel? Ahk B'aluun Otoot utiiy Chiik Naab'

すなわち、「キニチ・カップ（？）・ネール（？）・アフク・バルーン・オトート K'inich K'ap? Neel? Ahk B'aluun Otoot がチーク・ナフブで死んだ」と記されている（Guenter：３)。また、第３行には、

Yuknoom Ch'een Ux Te' Tuun Kal(oom)te'

「ウシュテトゥーンのカロームテ Kalomte、ユクヌーム・チェン」と刻まれているのであ

る（Guenter：5-6）。これらの例から判断して、現在のカラクムル遺跡がある場所がチーク・ナフブと呼ばれていて、ここを首都とする国家の名がウシュテトゥーンだったと考えられる[19]。このように、7世紀に入ってようやく、カーン王とカラクムルが結びつくのである。

これらのことからも、カーン王朝はツィバンチェからカラクムルへと遷都したのではないか、と考えられているのである。カーン王であるユクヌーム「頭」王が、ウシュテトゥーンすなわちカラクムルで即位していることから、彼の治世には既にカラクムルがカーン王朝の首都であったことは確かなのだが、実際にはもっと前の「渦巻き蛇 Scroll Serpent」王の代に、ツィバンチェからカラクムルに遷都していたかも知れない。と言うのも、カラクムルには彼自身が建立したモニュメントは存在しないのだが、657年にユクムーム・チェン2世が建立した石碑33に、「渦巻き蛇」王の即位や、彼が9.8.0.0.0（593年8月22日）にカトゥン完了の儀式を行ったことが記されているからである（Martin 2000：43；Martin and Grube 2000：105）。同王は9.7.5.14.17 11カーバン kaban 10チェン ch'en（579年9月2日）に即位している。これは、ツィバンチェのモニュメント2aに記された日付のわずか6年後である。もし「渦巻き蛇」王の治世の間にカーン王国がツィバンチェからカラクムルに遷都したとすれば、その時期はカラクムルの「エリートグループ」のモニュメントが製作されて間もなくの頃ということになる。「渦巻き蛇」王による遷都の実行は、彼の国家戦略と何らかのかかわりがあるのではなかろうか。この点については後述する。

では、首都がツィバンチェからカラクムルに移ったとすると、それ以前にカラクムルに居住していた人々は何者だったのだろうか。換言すれば、カーン王朝とカラクムルのもともとの居住者との関係は、どういうものだったのだろうか。カラクムルも、ツィバンチェと同じく、人々が居住を開始したのは先古典期中期にまで遡る（Folan et al. 1995：316）。しかも、先古典期後期に、規模の点では古典期後期のティカルやカラクムルをも凌駕するような巨大都市に成長したエル・ミラドール El Mirador と密接な関係があったであろうことは、両都市がサクベで結ばれていたことから窺える（Folan et al. 1995：311；Sharer 2006：252）。両都市の関係を示唆するもう一つの事柄として、カラクムル最大の建物である建築物Ⅱが、エル・ミラドールでも最大規模の建築コンプレックスであるエル・ティグレ El Tigre グループと、規模や形態の点で酷似していることが挙げられるのだが、この建築物Ⅱは先古典期後期に建築が始まり、この時期に既に階段状の基壇の高さは現在の高さに達しているのである。このことからわかるように、カラクムルには、カーン王朝の痕跡が現われる以前に、既にかなり強力な勢力が存在していたと考えられるのである。

しかしながら、ティカルを始めとする他の都市では、古典期前期から活発に石碑などのモニュメントが建立され、王家の歴史が記録されたのだが、カラクムルには碑文史料が極めて乏しく、それがこの時期のカラクムルの歴史を理解するのを困難にしている。実際、カラクムルには120近い石碑があるのだが（Carrasco 1998：380）、古典期前期に建てられたのは、石碑114と石碑43の二つだけなのである。石碑114は、先述した建築物Ⅱの基部

の壁龕に設置されたもので、正面に王と見られる着飾った人物の肖像、残る三面に文字が刻まれている。裏面のテキストは、長期計算法による8.19.15.12.1　38ベン ben 6モル mol（431年9月15日）の日付で始まっており、この長い碑文中に、“chi-ku-NAHB AJAW”「チーク・ナフブの王」という文字句が生起しているのである（Pincemin et al. 1998：318 Figure 7；Grube 2005：121；Martin 2005：10）。これは、「チーク・ナフブの王」という称号の最初の生起例なのだが、その代りこの碑文にはカーン紋章文字は生起していない。また、同じく建築物Ⅱで見つかった石碑43には、両側面に文字が刻まれており、その中に9.4.0.0.0　13アハウ18ヤシュ yax（514年10月16日）という日付が見出される。この碑文の主役となる人物は、アフ・クフ・ビフ？・ア AJ-K'UH-BIH?-a という現在のところ未知の人物なのだが（Martin 2004：6）、この人物は「クフル・チャタフン・ウィニク」“k'uhul chatahn winik”[20]という称号を伴っているのみである。ここでも、蛇頭紋章文字は欠如している（Martin and Grube 2000：103；Verasquez García 2004：81註6・2005：2）。

ツィバンチェのモニュメント15のテキストから、遅くとも5世紀後半には蛇頭紋章文字が存在していたことは間違いない。しかしながら、カラクムルでは、431年という日付が刻まれた石碑114はともかく、6世紀以降に建立されたのが確実な石碑43に蛇頭紋章文字はない。それどころか、631年になるまで、カラクムルとカーン王朝との関連を示すものは、何一つ存在しない。

しかも、ツィバンチェにカーン紋章文字が初めて生起した後も、カーン王朝の活発な対外活動の痕跡は、各地の碑文からも確かめられる。たとえば、ヤシュチランの建物12のリンテル35の碑文は、カーン王[21]カルトゥーン・ヒシュの一臣下が、9.5.2.10.6（537年1月16日）に同地で催された儀式に参加している（Schele and Freidel 1990：175）。また、ナランホの石碑25によると、ナランホ王アフ・ウォサル Aj Wosal の9.5.12.0.46カン3シップ sip（546年5月5日）の即位の儀式を、同王が主宰したことが知られる（Graham 1978：2：70；Carrasco 2000：17；Martin and Grube 2000：72）。カルトゥーン・ヒシュの後を継いだカーン王「空の証人」王も、572年にカラコルとの同盟を強化したことが、同地の石碑3に記されている（Carrasco 1998：382, 2000：17）。また、ロス・アラクラネス Los Alacranes の石碑1によると、561年に同地のサック・バーフ・ウィツィル Sak B'aah Witzil が、「空の証人」王の後援のもとで王位に即いている（Grube 2004：35；Spraj 2007：79）。「空の証人」王の名は、この他にもパレンケ Palenque やレスバロン Resbalon の碑銘の階段や、ヨーコップ Yo'okop の「石B」でも言及されている（Carrasco1998：382；Martin 2000：43；Wren, L. et al.：92）。ヨーコップでは、「石B」以外にも「空の証人」王を指すと見られるテキストがあるのだが、それからは「空の証人」王がヨーコップの支配者であったことが考えられる。地理的に考えると、完全に低地北部に入るヨーコップを支配していたのは、カラクムルよりはツィバンチェの方が相応しいと言えよう。

「最初に斧を振るう者」王に続く「渦巻き蛇」王は、パレンケに対して二度にわたる遠征を行ったことで知られる。最初は599年4月21日、続いて611年4月4日にパレンケを攻

撃し、略奪したことが、「碑銘の階段」東パネルに記されている(Martin and Grube 2000：159-160)。彼の名は、カラコルの石碑４にも生起している。

カラコルの別のモニュメント石碑３には、9.9.5.13.8　4ラマット lamat 6パシュ（619年１月９日）に、カラコル王カン K'an 2世が行った何らかの行為に関連して、「渦巻き蛇」王の後を継いだユクヌーム・チャン Yuknoom Chan の名が言及されている（Schele and Freidel 1990：174)。

最後に、ユクヌーム「頭」王の前の王であるタフーム・ウカブ・カック Tajoom Uk'ab' K'ak'の名は、ナランホの「碑銘の階段１」の階段６のテキストの中で、言及されている。

このように、ユクヌーム・チェン１世とユクヌーム「頭」王の間に、現在判明している限りでも五人もの王が存在し、その名が蛇頭紋章文字と共に各地のモニュメントに刻まれているのにもかかわらず、カラクムル自体の同時期のモニュメントには、蛇頭紋章文字は存在しないのである。しかも、外地でカーン王の名が言及される際には、カラクムルの地名を指す文字を一切伴っていない。それに対し、ツィバンチェには、明らかにカーン王の戦勝記念モニュメントが残っている。これらのことを考え併せると、古典期前期にカーン王朝がカラクムルに本拠地を置いていたと考えるのは困難である。当時のカーン王国の首都はツィバンチェであったと考える方が、少なくとも可能性が高いとは言えるであろう。

他方、「渦巻き蛇」王がカラクムルに遷都したとして、それ以降のカラクムルに、以前と比べて大きな変化があったとも感じられない。ツィバンチェを本拠地とするカーン王国が、武力でカラクムルに侵略した痕跡が見当たらないし、またツィバンチェにも、「捕虜の建物」のモニュメント以外に、カーン王朝の存在を窺わせる証拠が乏しいのも確かである。ペテシュバトゥン Petexbatún 地域のドス・ピラスとアグアテカ Aguateca が、同じ王国の「第一首都」と「第二首都」の関係にあったように、カラクムルもツィバンチェと同様、カーン王国内の都市であった可能性も、現時点では否定できない。

5．おわりに

古典期は、低地南部マヤ社会の二つの「超大国」ティカル王国とカーン王国が、他国を巻き込んで覇権を争った時代であった。カーン王国で、ツィバンチェからカラクムルへの遷都があったとしたら、その理由はこのような時代背景によるのではなかろうか。第４章で記したように、カーン王国がカラクムルを本拠地とするようになったのは、６世紀の「渦巻き蛇」王以降のことだと思われる。この時期は、カラコルと同盟関係を結んだカーン王国が、ティカルと戦いを繰り広げ、最終的には勝利を収めた頃である。ティカルとの戦争を遂行するに当たっては、より近いカラクムルの方が、戦略的に有利であろう。また、６世紀は、カーン王国がヤシュチランと関係を持ったり、パレンケを攻撃したりと、低地南部における対外活動を活発化させた時期でもある。このような活動を遂行する上で、ツィバンチェという低地南部のほとんど北端に位置する場所が、不便になってきたのではなかろうか。そのため、戦略的により優位な立地条件にあるカラクムルに活動の根拠を移したのである。

低地南部マヤ地域には、数多くの都市遺跡が存在する。そのため、各都市が独立国家の主都なのか、それとも二つあるいはそれ以上の複数の都市が単一の国家に属していたのか、判断するのは困難である。ドス・ピラスとアグアテカように、近距離にある都市の場合は、同一国家にあったとしても納得しやすい。しかし、ティカルとドス・ピラスのように、距離が離れているにもかかわらず、同一の紋章文字を有している場合、何を意味するのかわからなかった。結局この問題を解決したのは、地道な碑文解読の進展であった。ツィバンチェとカラクムルの関係も、今後の新たな碑文の発見や解読が、問題解決に不可欠であろう。

註

(1) 観光地としてのカラクムルの重要性に関しては、(佐藤　2006) を参照。

(2) カラクムルの最大の支配領域は約13000㎢、人口は175万人であったのに対し、ティカルのそれは12600㎢、150万人であったと推定されている (Braswell et al. 2004：167；Folan et al. 1995：310, 2001：227)。

(3) 以降、蛇頭紋章文字と呼ぶことにする。

(4) 1980年代以降、先ずフォーラン William Folan 率いるカンペチェ自治大学が調査を行い、その後カラスコ Ramón Carrasco が指揮するメキシコの国立人類学歴史学研究所が大々的な調査を実施している。

(5) 蛇の頭の形をした文字は、しばしばクフル k'uhul (「神聖な」) という接字と、古典期の王に対して用いられるアハウ ajaw という接字を伴って生起する。そこで、本稿では煩瑣を避けるために、現マヤ語で蛇を表す言葉がカーンであるので (Barrera Vasquez 1995：291；Velasquez García 2005：1-2)、蛇頭紋章文字を持つこの国家あるいは王朝の名称を、カーンと呼ぶことにしておく。従って、クフル・カーン・アハウという文字句は、「カーンの神聖王」という意味になる。

(6) ツィバンチェ・グループで発見された木製のリンテルの一つに、長期計算法で554年の日付が刻まれているものがあり、このリンテルにちなんで遺跡はツィバンチェと名付けられた (Nalda 2004：15)。

(7) ツィバンチェの建築の規模もかなり大きく、この遺跡を調査した碑文学者のグルーベ Nikolai Grube は、カラクムルに比肩しうると述べている (Verasquez García 2004：102 註39)。

(8) 中央コンプレックス、キニチナーのアクロポリス、「フクロウの建物」などのペテン様式の大規模建築も、古典期前期に既に最大規模に達していた (Nalda 2004：14・24-25)。

(9) なお、ペテン様式の建築技法は、トゥティル地区を除く三つの地区の初期の建物に明瞭に見られる (Nalda 2004：14)。

(10) 各ブロックはモニュメントと呼ばれ、２から22までの数字が付されている。モニュメント２、モニュメント７とモニュメント８の三つは、更にａとｂの二つに分かれて

おり、モニュメント10はa、b、cの三つに分かれている。

(11) ナランホの碑文でも、同王国の重要な場所と考えられるサール Sa'aal が、ナランホ王のチェンとして言及されている（Tokovinine 2007：15）。

(12) ナルダ Enrique Nalda は、この「オチ・チェン」という句について、もう一つの解釈も提示している。すなわち、穴は地下世界への入り口とも考えられているので、死ぬべき運命にあった捕虜が、死後地下世界へと入って行くことを表しているというのである（Nalda 2006：29）。しかし、マヤ地域のモニュメントは、支配者が自らの権威を視覚的に顕示あるいは正当化するために建てられており、敗者の地下世界への旅をわざわざモニュメントで表現したとは思えない。

(13) 本稿の碑文の訳は、ベラスケス・ガルシアによる碑文のスペイン語訳（Verasquez García 2004：87-102）に依拠している。

(14) 判読できるのは、バーラム B'ahlam とユクヌーム・チェンの文字だけである。捕虜の肖像も、ほとんど残っていない。

(15) GⅢは、いわゆる「パレンケ Palenque 三神」の一柱である。

(16) モニュメント22には、同日に別の捕虜が捕らえられたことが記されている。

(17) ユクヌーム・チェン１世の名は、このツィバンチェのブロックにしか生起していないため、詳細な経歴はおろか生没年さえも不詳である。従って、この戦勝記念のモニュメントで事績が顕彰されているのは、ユクヌーム・チェン１世も含めて、複数の王であることを否定することもできない。

(18) マヤ地域における紋章文字生起の最古の例は、長期計算法の8. 12. 14. 8. 15（292年）の日付が刻まれているティカルの石碑29に見られる（Marcus 1976：49 Table 5）が、この紋章文字は碑文の中ではなく、石碑に彫られた人物の頭飾りの中に含まれているものである。碑文中に生起した最古の例は、石碑１のテキストにあり（Michel 1989：92）、５世紀中頃と推測されている（Marcus 1976：49 Table 5）。

(19) ウシュテトゥーンが、カラクムルを含む広い領域の名称だと考えると、カラクムルの近郊にあるオシュペムル Oxpemul の碑文で、同地の王が「ウシュテトゥーンのオシュペムル王」として言及されているのも得心がいく（Spraj 2007：79；Tokovinine 2007：21）。

(20) チャタフン・ウィニク Chatahn（あるいはチャタン Chatan）Winik すなわち「チャタフンの聖なる人」という文字は、他にもエル・ミラドール近郊のアルタル・デ・ロス・レイエス Altar de los Reyes で見つかった祭壇３や、いわゆるコデックス様式の土器で見出されている。このチャタフンが何を意味するかについては、ナクベ Nakbe やエル・ミラドールのような起源の古い国家を指すのではないかとの説もあるが、現在のところ不明である（Sharer 2006：261）。

(21) ここでは、カーン王とは、蛇頭紋章文字を称号として伴う人物のことを指すものとする。

引用文献

佐藤孝裕

2006 「エコ・ツアーとしての遺跡観光－メキシコ、カラクムル遺跡の事例－」『別府大学紀要』第47号、1-8頁。

Braswell, Geffrey E., Joel D. Gunn, María del Rosario Domínguez Carrasco, William J. Folan, Laraine A. Fletcher, Abel Morales López, and Michael D. Glascock

2004 'Defining Terminal Classic at Calakmul, Campeche.' In The Terminal Classic in the Maya Lowlands: Collapse, Transition, and Transformation, eds. Demarest, Arthur A., Prudence M. Rice, and Don S. Rice, pp. 162–194. University Press of Colorado, Boulder.

Carrasco Valgas, Ramón

1998 'The Metropolis of Calakmul, Campeche.' In Maya, eds. Schmidt, Peter, Mercedes de la Garza and Enrique Nalda, pp. 372–385. Rizzoli International Publications, Inc., New York.

Carrasco Valgas, Ramón

2000 El cuchcabal de la Cabeza de Serpiente. Arqueología Mexicana, vol.Ⅶ, num. 42, pp. 12–19.

Carrasco Valgas, Ramón , Sylviane Boucher, Paula Alvarez González, Vera Tiesler Blos, Valeria García Vierna, Renata García Moreno, and Javier Vázquez Negrete

1999 A Dynastic Tomb from Campeche, Mexico: New Evidence on Jaguar Paw, a Ruler from Calakmul. Latin American Antiquity, vol. 10, No. 1, pp. 47–58.

Carrasco Valgas, Ramón y Marines Colon González

2005 El reino de Kaan y la antigua ciudad maya de Calakmul. Arqueología Mexicana, vol. XIII, num. 75, pp. 40–47.

Folan, William J., Joyce Marcus, Sophia Pincemin, María del Rosario Domínguez Carrasco, Laraine Fletcher, and Abel Morales Lopez

1995 Calakmul: New Data from an Ancient Maya Capital in Campeche, Mexico. Latin American Antiquity, vol. 6, no. 4, pp. 310–334.

Folan, William J., Joel D. Gunn, María del Rosario Domínguez Carrasco

2001 'Triadic Temples, Central Plazas and Dynastic Palaces: A Diachronic Analysis of the Royal Court Comlex, Calakmul, Campeche, Mexico.' In Royal Courts of the Ancient Maya, Volume Two: Data and Case Studies, eds. Inomata, Takeshi and Stephen D. Houseton, pp. 223–265. A Westview Press, Boulder.

Graham, Ian

1978 Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, vol. 2, part 2. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge.

Grube, Nikolai
2004 'El origen de la dinastía Kaan.' In Los Cautivos de Dzibanché, ed.Nalda, Enrique, pp. 117–131. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F..
Grube, Nikolai
2004 Ciudades perdidas mayas. Arqueología Mexicana, vol.XII, num. 67, pp. 32–37.
Guenter, Stanley
A Reading of the Cancuen Looted Panel. http://www.mesoweb.com/features/cancuen/Panel.pdf
Martin, Simon
2000 Los senores de Calakmul. Arqueología Mexicana, vol. VII, num. 42, pp. 40–45.
Martin, Simon
2005 Of Snakes and Bats : Shifting Identities at Calakmul. The PARI Journal, vol. 6, no. 2, pp. 5–15.
Martin, Simon and Nikolai Grube
2000 Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya, Thames and Hudson Ltd, London.
Nalda, Enrique
2004 'Dzibanché : el contexto de los cautivos.' In Los Cautivos de Dzibanché, ed.Nalda, Enrique, pp. 13–55. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F..
Nalda, Erique, y Sandra Balanzario
2006 Kohunlich y Dzibanché : los últimos años de investigación. Arqueología Mexicana, Vol.VIII, num. 76, pp. 42–47.
Pincemin, Sophia, Joyce Marcus, Lynda Florey Folan, William J. Folan, María del Rosario Domínguez Carrasco, and Abel Morales López
1998 Extending the Calakmul Dynasty Back in Time: A New Stela from a Maya Capital in Campeche, Mexico. Latin American Antiquity, vol. 9, No. 4, pp. 310–327.
Schele, Linda and David Freidel
1990 A Forest of Kings: The Untold History of the Ancient Maya. William Morrow and Co., New York.
Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler
2006 The Ancient Maya, 6th ed., Stanford University Press, Stanford.
Sprajc , Ivan
2007 Exploraciones recientes en el sureste de Campeche. Arqueología Mexicana, Vol.XV, num. 86, pp. 74–80.
Tokovinine, Alexandre
2007 Of Snake Kings and Cannibals : A Fresh Look at the Naranjo Hieroglyphic Stairway. The PARI Journal, vol. 7, No. 4, pp. 15–22.

Verasquez García, Erik
2004 Los escalones jeroglificos de Dzibanché. In Los Cautivos de Dzibanché, ed.Nalda, Enrique, pp. 79–103. Instituto Nacional de Antropología e Historia.
Velasquez García, Erik
2005 The Captives of Dzibanche. The PARI Journal, vol. 6, no. 2, pp. 1–4.
Wren, Linnea, Travis Nygard, and Ruth Krochock
'Monuments of Yo'okop.' In Final Report of The Selz Foundation's Proyecto Arqueologico Yo'okop 2001Field Season : Excavations and Continued Mapping, ed. Shaw, Justine M., pp. 80–104. College of the Redwoods, Eureca. http://online.redwoods.cc.ca.us/yookop/Yok_2001_report_text&figs.pdf